慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーストリク語族は果して存在なすや : デ・ ヘヴェシイ氏の新説
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.96- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーストリク語族は果して存在なすや

――デ・ヘヴェシイ氏の新説――

ペール・シュミット師が、印度支那のモン・クメル語と、印度のムンダ、ニコバル島語などの間に相似を見出だし、オーストロアジアチック語なる語族を作り、之と太洋州に散布する、インドネシア語族とを結んで、オーストリック語といふ大語族をつくりだし、之に對し學界はほゞ賛意を表した。しかして此語族と支那語との關聯を見出ださんとするコンラディの試み、日本語にその顯著なる影響を見出さんとしたる予の研究など出で、オーストリック語族の境界は次第に周圍に擴大せられつゝある。シュミット師は最近ドイツ東洋學總會に於て予の著書を批評され、予が日本語をオーストリック語族に歸屬せしめてをると誤解され、日本語に、アルタイ語族と共に、オーストリッシュ語族が、重大な影響を及してをるのであるといふ意見を提出されて居る（民俗學二卷十號所載同氏論文及び予の譯文參照）。同氏の意見に自分は悉くは賛成すること不可能なるも、新説をいるるに吝ならず、之を不問に付さぬ外國學者の度量は欣慕に堪えぬ。

所が最近更に、オーストリアのデ・ヘヴェシイ氏　W. F. de Hevesy によつて、シュミット氏のオーストリック説に對する一異論が提供された。それは the Bulletin of the School of Oriental Studies, London Institution, vol. VI. Part I に寄稿された「シュミットのムンダ・モン・クメル比較に就て（オーストリック語族は存在なすや？）」On W. Schmidt's Munda-Mon-Khmer Comparisons. (Does an "austric" family of languages exist ?) といふ小論文である。同氏は、この中にシュミット氏が、ムンダ語とモンクメル語との關聯をうちたてるに使用した語彙の比較を檢討し、シュミット師がモンクメル語の語根に前添詞を附した形に過ぎぬと斷定した多くのサンタリの單語が實は後添詞をつけた形に外ならぬ。このことをシュミット師の利用した、キャンプベルのサンタリの辭書を同樣使用して論證することが出來ると述べてをる。一例を示すとサンタリ milap（一致・調和）とバナル läp（充分・適當）をシュミット師が結びつけたが、サンタリに mil（調和）milau（調停する）milwa（愛情）mili misi（和合）の諸語あり、語根は寧ろ mil であり läp でないといふのである（同氏はこういふ例を七〇あげ、空地があればもつとあげるのだがと云ひ、ムンダ語は、シュミット師の云ふ如くしかくモン・クメル語に密接な親緣關係を有さぬと論じてをる。デ・ヘヴェシイ氏の考へによれば、ムンダ語は、フイノ・ウグリアン語族に屬すべきであると云ふ。然しその論證は他日に約されてをる。同氏の研究は東洋語系の研究の上に重要な影響を與ふべきものである。吾人は、同氏がそのムンダ語フイノ・ウグリアン語屬説に對し一日も早く確證を提供せられんことを期待する。（松本信廣）